

令和 3 年 6 月 3 日現在

機関番号：16201

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K18655

研究課題名（和文）医学部医学科及び臨床心理学科学生の早期からの多職種連携教育の実践とその評価の検討

研究課題名（英文）A practice and evaluation about early interprofessional education between department of medicine and clinical psychology

研究代表者

岡田 宏基（Hiroki, Okada）

香川大学・医学部・教授

研究者番号：00243775

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：医学部医学科と臨床心理学科とで1年次生に他職種連携教育（IPE）を行い、3年間その前後で共感（empathy）を比較した。評価にはJSEを用い、また授業レポートの分析も行った。JSEでは総スコアではIPE前後や両学科間で大きな差異は見られなかったが、20質問項目中個々の項目では両学科間で差が見られた。年度で幾分の差はあるが、医学科ではIPE後に低下する項目が複数見られたのに対し、臨床心理学科では逆に複数の項目で上昇が見られた。レポートの分析では両学科間で大きな差異は見られなかった。このことはIPE以外の授業科目の差か、あるいは入学時の学科選択に対する心構えが反映された可能性もあると推察された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

医療プロフェッショナリズムの大きな柱である「共感」力が、医学科学生や臨床心理学科学生の教育過程においてどのように形成されてゆくかという研究はまだ十分ではない。医学科学生については、年次進行に伴って共感のスケールであるJSEスコアが低下するという報告が見られるが、臨床心理学科学生についてはそのような研究は見られていない。本研究では、両学科間で他職種連携教育（IPE）を行い、その前後でJSEスコアを比較したところ、医学科ではいくつかの項目でIPE後に低下する傾向が見られたのに対し、臨床心理学科では上昇する項目が見られ、今後の医療プロフェッショナリズム教育を行ってゆく上で示唆に富む結果と思われた。

研究成果の概要（英文）：We conducted a program of Interprofessional Education (IPE) between department of medicine and clinical psychology, and evaluated empathy between both departments in three years. We used JSE to evaluate empathy and analyzed reports at the classes. There was no significant difference in total score of JSE between both departments and before and after the IPE. However, differences were seen in several items of JSE. Some item scores decreased in department of medicine after IPE. On the other hand, some item scores increased after IPE in department of clinical psychology. There was no significant difference in analysis of reports between both departments. Difference of the classes other than IPE classes and difference of mental preparation to select medicine or clinical psychology before admission might influence the results of this study.

研究分野：医学教育

キーワード：多職種連携教育 共感 医学部臨床心理学科 JSE

## 1. 研究開始当時の背景

近年、医療人の育成に当たって、多職種連携教育(IPE)の必要性が認識されており、国内でも各種の試みがなされている。これはそれぞれの資格を得た後のチーム医療の実践に際して、卒業前から学生間の交流を図ることにより、互いの職種に対してその職責や技能・態度等についての理解を深め、チーム医療の実践を円滑にしようとするものである。

一方、昨今の医学教育においては、「プロフェッショナリズム教育」が重視され、平成28年改訂の「医学教育モデル・コア・カリキュラム」においてもプロフェッショナリズム教育に関してかなりの紙面を割いて記載されている。香川大学医学部においても、平成24年度より1,2年次学生に対してそれぞれ半期(いずれも2コマ)ずつプロフェッショナリズム教育のプログラムを設け、講義や実習を行って来ている。

香川大学医学部では、平成30年に国立大学医学部では初の臨床心理学科を開設した。ここでは、医学部に設置する利点を活かして、幅広く医学・医療の知識を有する心理援助者を育成することを目的の一つとし、それが可能な教育プログラムを構築している。その中で、入学早期から医学科学生との多職種連携教育を行うことを特徴の一つとして位置づけており、臨床心理学科学生への医学科学生の影響のみならず、医学科学生への臨床心理学科学生の影響も大きく期待できる。身体と精神・心は密接に結びついているためその相互作用に常に配慮する必要がある。また、がんなどの難治疾患の患者の心に寄り添う必要性からも、心に関心を持つ学生との入学時からの時間の共有は大きな意義を有すると考えている。

## 2. 研究の目的

この全国に例を見ない環境を活用し、医学科学生および臨床心理学科学生において、IPE前後でプロフェッショナリズムの一要素である共感力がどのように変化するか、また共有した授業のレポートの分析等を通じて、他の要因を分析することを本研究の目的とした。

## 3. 研究の方法

(1) IPE教育:1年次前期では、医学科・臨床心理学科合同で医学概論の講義を7回に渡って受講する。後期では医学科における「医療プロフェッショナリズムの実践」のうち、早期地域医療実習を2学科合同で行う。これは、地域の第一線医療機関と高齢者保健福祉施設をそれぞれ半日×2回(連続した2週)体験実習を行うもので、医学科学生と臨床心理学科学生とを同一実習先で体験を共有させる。これに先だって、頻度の高い疾患の概要についての講義を行い、また実習を行うにあたってのマナーや守秘義務等についてのグループワークを行った。IPE後は実習機関への感想文を書かせ、最後に両学科合同で実習の発表会を行った。

### (2) 共感力尺度の経時的比較

医療専門職のプロフェッショナリズムを評価する方法として、医学教育分野で広く使用されている共感力尺度(Jefferson Scale of Empathy; JSE)の日本語訳学生版(片岡, 2009)を用いる。入学直後には1泊2日の合宿研修を医学科・臨床心理学科同一日程で行うため、この時期にJSEを取得する。その後は、各年次末に両学科の学生に対してJSEを取得し、両学科学生の比較を行う。

JSEの総スコアのIPE前後および両学科間の比較を行い、またJSEの各項目について同様の比較を行う。

これらを3年間年度ごとに行い、また最終的に3年分まとめた評価を行う。

### (3) レポート分析

前後期を通じて合同で受講した講義や、合同で行った実習についてのレポートを電子化し、文書解析し

フトを用いて単頻度分析を行い、両学科間で差があるかを検討した。

#### 4, 研究成果

##### (1) JSE 総スコアの分析

JSE 総スコアは、全体として110前後であり、これは国際的な先行研究の結果とも一致する。医学科・臨床心理学科間、および IPE 前後でも総スコアの平均値には差がなかった。また男女差も認めなかった。

先行研究では、医学科において、学年が進行するにつれて JSE スコアが低下するという報告が多く見られる。本研究においても、縦断的に1年生から5年生までのスコアを比較したが、その結果が下記である。

学年	JSE 総スコア
1	113.3
2	109.4
3	106.1
4	104.6
5	103.4

先行研究で報告されたような学年進行に伴う低下が見られている。

臨床心理学科では初年度学生を3年間追跡したが、その結果は、

時期	JSE 総スコア
1年目	110.0
2年目	112.2
3年目	114.4

となり、低下は見られず、むしろ上昇傾向が見られた。

##### (2) JSE 下位項目についての分析

JSE は20項目の質問から成り、8項目の compassionate care と、10項目の perspective taking という下位分類があり、2項目はその他となっている。compassionate care は「心理的に」共感するもので、perspective taking は相手の状況などを「理解」して共感するものとされている。

初年度は、IPE 前後において、医学科、臨床心理学科共に、compassionate care においては大きな変動は見られなかった。しかし、perspective taking においては、臨床心理学科において次の3項目、

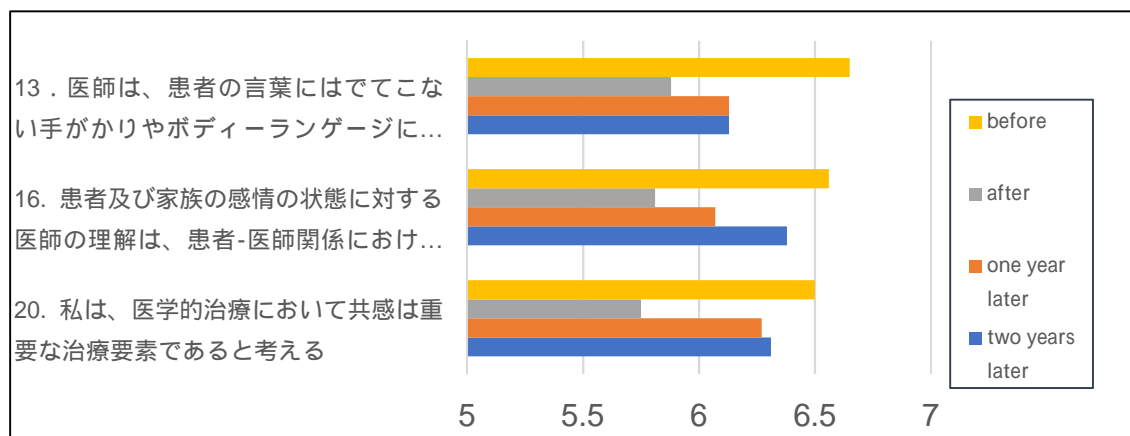
項目 No.13 医師は、患者の言葉にはでてこない手がかりやボディランゲージに注意を払うことによって、患者の考えていることを理解しようとするべきである。

項目 No.16 患者及び家族の感情の状態に対する医師の理解は、患者-医師関係における重要な構成要素の一つである。

項目 No.20 私は、医学的治療において共感は重要な治療要素であると考える。  
において、IPE 後に有意な低下が見られた。

2年目、3年目においては、臨床心理学科においても、このような低下は見られなかった。

初年度に低下した3項目について、同一の学生について、3年目まで経過を追跡したのが次のグラフである。いずれの項目においても、学年進行と共にスコアの上昇が見られている。



### (3) 3年間通じての分析

3年間を通じて、IPE の前後で JES の各項目について増減を比較した。医学科においては、compassionate care で低下する項目が多く見られた。3年中2年以上で低下を見た項目は、

項目 No.6 人はそれぞれに異なっているので患者の視点で物事を見ることは困難である。(逆転項目)

項目 No.8 患者の個人的な経験に心を配ることは、治療結果に影響を及ぼさない。(逆転項目)

項目 No.11 患者の病気は内科的、または外科的治療のみによって治癒しうる。従って、医師が患者と情緒的な心の結びつきを持つことは、内科的、外科的治療に著明な影響を与えない。(逆転項目)  
臨床心理学科においては、perspective taking で上昇する項目が多く見られた。3年中2年以上で上昇を見た項目は、

項目 No.2 医師が患者の気持ちを理解したら、患者はより快適と感じる。

項目 No.5 医師のユーモアのセンスはより良い臨床的結果をもたらす。

項目 No.10 患者は、彼らの気持ちを医師が理解することは、そのこと自体で治療効果があると評価している。

項目 No.17 より良いケアを提供するために、医師は患者と同じように考えるよう努めるべきである。

であった。

### (4) レポート分析

分析に使用したのは以下のレポート等である。

・医学概論(前期:臨床心理学科の講義題目は「心理学概論」) 7回

・「医療プロフェッショナリズムの実践」(後期:臨床心理学科の講義題目は「早期体験学習(他職種連携)」)における、合同授業、合同グループワークの講義レポートおよび実習感想文

これらの紙レポートを人力にて電子化し、文章解析ソフトを用いて、単語頻度分析を行い、両学科で年度別に頻度の現れ方を比較した。

臨床心理学科では、初年度において、IPE 前後共に「医学」「医療」に係わる単語が医学科に比して高頻度に見られる傾向があった。しかし、2年目、3年目ではこのような差は見られなかった。

医学概論のレポートについては、2年分、ないし3年分のレポートを統合して、まとめて解析を行ったが、いずれの学科も講義内容に関する単語が高頻度で見られ、「共感」に関する単語はほとんど出現しなかつ

た。心理に係わる単語が見られたのは、ストレス対処に係わる講義の時であったが、これも講義内容を反映したものであった。

#### (5) 考察

香川大学医学部臨床心理学科では、医学的な知識を十分に備えた心理職を育成することを大きな理念としている。このため、3年次生まで医学的な講義を継続して行っている。1年次生は医学的内容の講義が心理学の講義を上回っている。

初年度において、臨床心理学科で IPE の前から後で低下した項目が見られたが、これは医学を学ぶことで、心理学的に理解することより医学的に理解するという視点が強くなったためかもしれない。レポートの分析もこの推測の傍証となっている。別の側面では、初年度の臨床心理学科学生は、本学科の一期生であり、心理学に対する期待がそれ以降の入学生に比して大きかった可能性もある。実際、低下した3項目の IPE 前の値は、2, 3年目の学生より高値となっており、この学年において、IPE 後の低下が目立った可能性もある。これら低下した項目について初年度の学生の経過を見たところ、IPE 後に比して2年目、3年目と徐々に上昇が見られた。これは心理学を学ぶことによって、心理学的な理解も進んだためと推察される。

3年間を通じての比較では、医学科学生と臨床心理学科学生とで異なった反応が見られた。先に示した、医学科学生で学年進行に伴って JSE スコアが低下する理由としては、学年が進むと、医学的な事項に対して知識や技能を習得する必要性が増し、生活に余裕がなくなったり、臨床実習を通じて患者の状態を目の当たりにしたりして、次第に「共感」することが困難になってゆくのではと推察されている。今回の IPE では、後期に医療や福祉の現場において実習する機会を設けている。さらに1年次の時から医学部での自然科学系専門科目を開講している。このために、医学科学生においては学年進行に伴って生じる現象が短時間で生じた可能性もある。これに対して、臨床心理学科では IPE 前から後で、医学科に比べてスコアが上昇する傾向が見られた。1年次生では両学科でかなりの時間を共有しているが、臨床心理学科学生は医学科学生のような専門科目はなく、その時間は教養科目に割り当てているため、医学科学生に比べると精神的余裕があることもこの差に関係しているのかもしれない。さらには、医学を学ぼうという姿勢と心理学を学ぼうとする姿勢の違いも関係しているのかもしれないが、この点については本研究では明らかにすることはできなかった。

レポートの分析では残念ながら、両学科間の顕著な差を見出すことはできなかった。これは、レポートといっても、多くの学生は講義内容の要約のような内容になっていたため、頻出単語において両学科間で差が見られなかったものと推察される。レポートでは差がなかったが、JSE では両学科間に差が見られたことより、レポートで差を見出すためには、自由にレポートを書かせるのではなく、「共感」といったキーワードを入れてレポートを書かせることが必要と考えられた。

#### (6) 結語

医学科学生と臨床心理学科学生との間で多職種連携教育を行った前後で共感のスケールを比較した結果、両学科間で差異が見られた。この結果は今後の医療プロフェッショナリズム教育を進めてゆく上で示唆に富む結果と考えられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 岡田宏基、坂東修二、黒滝直弘、神原憲治、野口修司、川人潤子
2. 発表標題 医学部臨床心理学科と医学科学生との多職種連携教育前後でのempathyの相違についての検討
3. 学会等名 第51回日本医学教育学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hiroki Okada, Shuji Bandoh, Naohiro Kurotaki, Kenji Kanbara, Shuji Noguchi, Junko Kawahito
2. 発表標題 Investigation of changes of empathy levels in clinical psychology and medical students of Japanese medical school before and after Interprofessional Education
3. 学会等名 An International Association For Medical Education (AMEE) 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hiroki Okada, Shuji Bandoh, Naohiro Kurotaki, Kenji Kanbara, Shuji Noguchi, Junko Kawahito
2. 発表標題 A two-year follow-up study of empathy in students of clinical psychology before and after IPE with students of medicine
3. 学会等名 An International Association For Medical Education (AMEE) 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	坂東 修二  (Bandoh Shuji)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	黒滝 直弘  (Kurotaki Naohiro)		
研究協力者	神原 憲治  (Kanbara Kenji)		
研究協力者	野口 修司  (Noguchi Shuji)		
研究協力者	川人 潤子  (Kawahito Junko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関